

I 福音 (ヨハネ 16 章 12 - 15 節)

12 「言っておきたいことは、まだたくさんあるが、今、あなたがたには理解できない。13 しかし、その方、すなわち、真理の霊が来ると、あなたがたを導いて真理をことごとく悟らせる。その方は、自分から語るのではなく、聞いたことを語り、また、これから起こることをあなたがたに告げるからである。14 その方はわたしに栄光を与える。わたしのものを受けて、あなたがたに告げるからである。15 父が持つておられるものはすべて、わたしのものである。だから、わたしは、『その方がわたしのものを受けて、あなたがたに告げる』と言ったのである。」

言葉の解説

12 節 ■ 「あなたがたには理解できない」。ここに用いられたギリシア語(バスタゾー)は「拒う・耐える」をも意味する。ここでは「聞いて理解することに耐えられない」の意味であれば、弟子たちはイエスの言葉を理解する力を欠いていることになる(新共同訳)。しかし、「イエスの言葉がやがて引き起こすことになる迫害に耐えられない」の意味にも取れる。後者であれば、弟子たちはイエスの言葉を理解できるとしても、その結果を恐れて保つことができないの意味になる。ここではおそらく両方、つまり、弟子たちはイエスの言葉を十分な意味において理解できただけでなく、イエスの言葉を運び続ける勇氣にも欠けていることを指しているだろう。

13 節 ■ 「自分から語るのではなく」。人の子についてもこれと同じことが語られている(一四・二四、一四・10)。■ 「告げる」。この語(アナングエッロー)は、「ある場所から戻って(アナ)、報告する(アングエッロー)」を意味する合成動詞。「真理の霊」である聖霊は、イエスの言葉を携えて天から戻り、それを弟子たちに告げて彼らを理解へと導く。

14 節 ■ 「栄光を与える」。聖霊はイエスの業を引き継ぐことによつて、イエスの素晴らしさを現し、イエスに栄光を与える。■ 「わたしのもの」。聖霊が弟子たちに与えるものは「わたしのもの」である。15 節では、それが「父の持つておられるものはすべて、わたしのもの」と言われている。父と子の天上の交わりが、「告げる」ものである聖霊によつて、地上にいる弟子たちにもたらされる。父と子と聖霊が一体になって、人を導く。

① 今週の福音では、受難を前にしてイエスが弟子たちに語った「告別説教」からの言葉が朗読されます。「告別説教」は三部に分けられますが(13 - 14 章、15 - 16 章、17 章)、今週の福音はこの二番目の一部です。

イエスはまだ自分の言葉と業を理解していない弟子たちに、「自分が天に上ったあと、遣わされることになる「真理の霊」の働きを説きます。「真理の霊」は、弟子たちを「導いて真理をことごとく悟らせ」、死と復活を通して現されるイエスの栄光の業を「語り、また、これから起こることを告げる」方です(13 節)。ここで「告げる」と訳された動詞は、「ある場所から戻って報告し知らせる」の意味です。しかも、この動詞は13 - 15 節に三回(未成形で)繰り返され、イエスの教えを地上で「告げ知らせる」真理の霊の働きを力説しています。

「真理の霊」は「自分から語るのではなく、聞いたことを語り、また、これから起こることを告げる」のであり、イエスの教えを受けて、それを弟子たちに伝えるメッセンジャーとなります。真理の霊がイエスに「栄光を与える」ことになるのは、イエスの教えを理解させ、その素晴らしさを明らかにするからです。

地上のイエスは、父である神を弟子たちに示し、その父に遣わされた子としての業を現しました。イエスがこの世から去った後は、「真理の霊」がイエスに代わって父の業を示し、イエスの栄光を人々に告げ知らせます。これが「真理の霊」の役割です。

イエスが「真理の霊」の派遣を約束するのは、その助けなしには弟子たちがイエスの言葉を理解できず、父と子の交わりのうちにとどまることができないからです。弟子たちとの別れを前に、イエスには弟子たちに伝えておきたいことがたくさんあります。しかし「今」彼らはそれを理解することができません。やがて「真理の霊」がやってきて彼らを理解へと導きます。

ここで「今」と言い表されているのは、もちろんイエスとの別れを悲しむ弟子たちの「今」です。しかし、同時にそれは「真理の霊」による導きが必要となった「今」でもあります。つまり、ヨハネの共同体が生きる「今」でもあり、さらにはすべてイエスを信じる者が生きる「今」でもあるのです。弟子たちも、ヨハネの共同体も、現代に生きるわたしたちも、「真理の霊」に導かれなければ、イエスの言葉を理解することができず、その教えが何であるかを悟ることができません。「真理の霊」によってそれらを理解するとき、「今」がそれまでとはまったく違う次元へと変えられます。

② イエスは、「父が持つておられるものはすべて、わたしのものである」と語っています（15節）。だから、父と子と霊が語ることはそれぞれ別なことではありません。父と子と霊は互いの深い交わりの中から、ただ一つのことを人間に向かって語りかけます。父が語り、子が語り、さらに霊が語るときがやってきます。語るのが誰であっても、すべてそれは人間を「真理」へと導くためです。

父と子と霊との交わりは人間を真理へと導くための交わりです。父と子と霊は、一つになって信じる者を導き、絶えず心配りをしています。イエスとの別離を悲しみ恐れていた弟子たちは、やがて彼が地上を去ったにもかかわらず、かえって親密な存在となり交わりが深まっているのを感じるようになります。この「真理の霊」の働きにあずかる者の中には、もちろん私たちも含まれています。

③ 「導く（ホデーグオー）」の意味。
この語は名詞ホデーゴス（道案内人・指導者）から派生した動詞で、文字通りには「道案内をする・導く」を意味します。

まず、マタ一五14「盲人が盲人の道案内をすれば、二人とも穴に落ちてしまう」では、文字通りの意味で使われています。同じ用法は黙七17「玉座の中央におられる小羊が彼らの牧者となり、命の水の泉へ導き、神が彼らの目から涙をことごとくぬぐわれる」に見られます。

転義して使われれば、「指導する・手ほどきして教える」の意味になります。たとえば、使八31「手引きしてくれる人がなければ、どうして分かりましょう」では、文字通りの道案内ではなく、聖書の言葉の理解のために手引きするの意味です。

今週の福音でも転義した意味で使われています。真理の霊（弁護者）が人を真理へと導けるのは、御父と御子から聞いたことを語るからです。聖霊は弁護者であり、真理の霊ですが、この聖霊によって、神は人々を命の泉へと導きます。

Ⅱ第一朗読(イザヤ6章1―8節)

1 ウジヤ王が死んだ年のことである。
わたしは、高く天にある御座に主が座しておられるのを見た。衣の裾は神殿いっばいに広がっていた。2 上の方にはセラフィムがいて、それぞれ六つの翼を持ち、二つをもって顔を覆い、二つをもって足を覆い、二つをもって飛び交っていた。3 彼らは互いに呼び交わし、唱えた。

「聖なる、聖なる、聖なる万軍の主(YHWH)。
主の栄光は、地をすべて覆う。」

4 この呼び交わす声によって、神殿の入り口の敷居は揺れ動き、神殿は煙に満たされた。5 わたしは言った。

「災いだ。わたしは滅ぼされる。」

わたしは汚れた唇の者。

汚れた唇の民の中に住む者。

しかも、わたしの目は王なる万軍の主(YHWH)を仰ぎ見た。」

6 するとセラフィムのひとりが、わたしのところに飛んで来た。その手には祭壇から火鉢で取った炭火があった。7 彼はわたしの口に火を触れさせて言った。

「見よ、これがあなたの唇に触れたので
あなたの咎は取り去られ、罪は赦された。」

8 そのとき、わたしは主の御声を聞いた。

「誰を遣わすべきか。」

誰が我々に代わって行くだろうか。」

わたしは言った。

「わたしがここにおります。」

わたしを遣わしてください。」

9 主は言われた。

「行け、この民に言うがよい

よく聞け、しかし理解するな

よく見よ、しかし悟るな、と。

10 この民の心をかたくなにし

耳を鈍く、目を暗くせよ。

目で見ることなく、耳で聞くことなく

その心で理解することなく

悔い改めていやされることのないために。」

11 わたしは言った。

「主よ、いつまででしょうか。」

主は答えられた。

「町々が崩れ去って、住む者もなく

家々には人影もなく

大地が荒廃して崩れ去るときまで。」

12 主(YHWH)は人を遠くへ移される。

国の中央にすら見捨てられたところが多くなる。

13 なお、そこに十分の一が残るが

それも焼き尽くされる。

切り倒されたテレビンの木、檜の木のように。

しかし、それでも切り株が残る。
その切り株とは聖なる種子である。

- ①この部分は次の三つの段落に分かれるだろう。
- ⑦「わたしは見た」で始まる1-7節は、「神の顕現」を描いている。
- ④「わたしは聞いた」で始まる8-13節は「神から受けた使命」を語る。
- ⑦12-13節は後代の付加。
- ②1-11節で傍線をつけた「主」はアードン（主人）の複数形に一人称の人称接尾辞がついた形アードナーイ。1節と8節と11節で、何の説明もなく「主人（アードナーイ）」と神を呼んでいるのは印象的。しかし、12節ではYHWHを用いる。
- ⑦神をアードナーイと呼んだのは第一イザヤが最初らしい。イザヤによって、「アードナーイ」が神名となり始めたといっただけだが、イザヤがそのように行ったのは、彼にとって「わたしの主人（アードナーイ）」がだれであるか明白であったからであろう。いずれにしても、やがて「ヤハウエ」を「アードナーイ」と読ませるほどに広まっていた。
- ④イザヤが神を「主人（アードナーイ）」と呼んだのは、その絶対的な支配を信じているからだだろう。
- ⑦しかし、イザヤには「創造者」、あるいは「創造の維持者」としてのYHWHは登場しない。創造を知らないわけではないだろうが、歴史に働くYHWHという側面が創造という概念を追い出している。歴史の「主人」としてのYHWHを考えている。
- ④イスラエルの民は「主人」を持っている。それは歴史を支配する神。その神の望みを果たすことが民の務め。
- ③9-11節の「頑迷預言」はシリア・エフライム戦争の後に書き換えられているのかもしれない。最初は「神の言葉を民は聞かないだろう」といった内容であったものが、イザヤを通して語る神の言葉を聞かなかった民のかたくなさを説明するために今のような形になったかもしれない。
- ⑦しかし、ヘブライ人たちは「罪のブーメランとしての罰」を考えるので、神が頑迷にするというよりは、頑迷になった民をそのままに放置するの意味だろう。
- ④そうであれば、罪がもたらす破滅を述べるのは、悔い改めをもとめることになろう。